

近年、日本では大規模な自然災害が発生しています。特に今日は東日本大震災から丸七年を迎え、各地で鎮魂、慰霊の供養が営まれることと思います。私たちは、古来よりさまざまな形で「供養」と関わってきました。

供養が捧げられる先は、人間やペットなどの動物に対してだけでなく、針供養や人形供養、最近ではロボット供養など、生き物以外に対しても行います。これは、大乘仏教の「一切衆生 悉有仏性」という言葉で語られる、あらゆる生き物に仏様の可能性が宿っているという考え方が、生き物以外にも広げられて考えられるようになったからでしょう。

例えば、私たちは身近にある物をなかなか処分できないことがあります。もしそれが亡くなられた大切な方の遺品であれば、なおさらのことです。東日本大震災では、亡くなられた方や行方不明の方が使っていた物や写真などが瓦礫の中から発見され、安堵の表情を見せたご遺族の方々の姿が紹介されることがあります。そこに発見された品々は、単なるものではなくなっています。

私たち日本人は、生き物以外のものに対してでさえ、命の息吹をそこに見出しているでしょう。

人や動物・ものに向けられる敬虔な思いや祈りの気持ちは、一般的に「供養」と表現されていますが、もともと「供養」とはどのような意味だったのでしょうか。仏教が生まれた国、インドの言葉である「プージャ」・「プージャナ」が翻訳されて「供養」という漢字が当てられたようです。その意味は“大切なお客様に対して敬意や尊敬の念を持ってふるまう”ということです。もしこれを私たちにとってしっくりくる言葉で表現するなら、東京オリンピックに向けて至る所で耳にする、あの「おもてなし」という言葉になるでしょう。私たちが供養に際して心掛けなければならないことは、供養する相手やものに対する「おもてなし」のこころなのです。

法要などの仏事においても、元のインドの言葉「プージャ」・「プージャナ」の意味を考えると、供養を捧げる相手を私たちの大切なお客様として想定しなければならないと思います。

「供養」の心得のひとつとして「在すが如くに」という言葉があります。あたかもその方がそこにいらっしゃるように向き合うことが、供養の基本であるという

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

ことです。お正月には歳徳神としとくじんさまを、お盆にはご先祖様を我が家にお招きするという習慣も、この「在いますが如ごとくに」を物語っているのかもしれませんが。

今日三月十一日、大切な方々かたがたを偲しのび、その方々へ深い思いをあらわす時、ぜひとも「おもてなし」の心で「在いますが如ごとくに」ご供養をしたいものです。

— 終 —